●ジャーナル

# 老人福祉課長と「デマの法則」

大熊由紀子●朝日新聞論説委員

**厚生省・老人福祉課長の弁**

**ねたきり老人、じつはピンピン**

**人間だけが年寄り大事に…不可解**

デマの法則というのがある。

アメリカの社会心理学者オルポートが提唱した式で

R〜I×A と書かれる。

Rは「デマが流布する量」

Iは「関心の強さ」

Aは事実をおおい隠している「あいまいさ」

〜は比例するという記号である。

たとえば、日本に上陸したばかりの中華まんじゅうやマクドナルドハンバーガーの売り手は、「犬の肉が入っているという話だ」「じつは、猫のひき肉で作るそうだ」といったデマに悩まされたという。

上陸したばかりで珍しいからIは大きい。中味の具の正体があいまいでAが大きい。だからI×Aはきわめて大きくなる。そこで、デマが広がりやすい、ということになる。

このオルポートの法則どおりのデマが、昨年、福祉の世界を走り回った。

デマの最初の媒体になったのは、残念なことだけれど、新聞記事であった。

という見出しで報じたある新聞の一月二十二日付夕刊の記事にはこうある。

「厚生省の老人福祉課長が、福祉施設担当者を集めた講演会で、老人を侮辱し、傷つけるような発言をしていた問題が二十二日の参議院決算委で取り上げられた。

質問に立った菅野久光氏(社会)が『老人を侮辱するような発想を持つ人を老人福祉の担当課の責任者として置くのは適切でない』と迫及。

菅野氏によると(略)課長は①他の動物と違って、人間だけがどうして老人を大事にするのかよくわからない、②ねたきり老人というが実際はピンピンしている人もおり、旅行に行って花笠音頭を踊っている、③特養では昼食にメロンがでることもある——などの趣旨の発言をしていたという」

他の新聞の記事も大同小異であった。

ところが、国会での質問のもとになった講演の記録をとりよせてみて、びっくりした。確かにそのような発言はあるし、言葉使いに乱暴すぎる点はあるのだが、続きを読んでいくと「暴言」とは思えず、

illustration : F.YANAGIDA





「暴」の字は記者につけた方がよいくらいなのである。①と③にそれがはなはだしい。

たとえば①のことばには次のような話が読く。

「逆にいうと、動物と人間の違いというのはそこにあるんじゃないか。それが人間の社会の進歩の源泉だったのではないか。基盤だったのではないか」。子が親を大切にするのは本能ではなく、人類は「親の世代を大事にする仕掛けを今日までつくってきたわけでございます」。その仕掛けは明治の昔は家制度であったが、高齢者がどんどん増えてきた今は「家制度じゃないわけです。そこに代置されるべきものが社会保障制度であり社会福祉の制度であると思います」——というのである。

③のメロンの話の次には、次のような言葉が続く。「そういう格好はいいんだけれども、それを支えるそれぞれの地域なり人びとの心のなかに、老人をこれから支えていくようなひとつの構造ができあがっておるんでしょうか」

これでは話はあべこべである。課長はお年寄りはこれからは社会福祉、社会保障の制度で支えなければならない。それも「メロンを昼食に出せばよい」というような表面的なものではダメである、といっているのである。

しかしデマは一人歩きを始めた。特集が組まれ、投書が載り、講演会や会合で、しばしば記事が引用された。

わずかに私どもの新聞が『「在宅老人への補助は枯れ木に水を注ぐのと同じだ」と課長が講演で発言した」という記事の訂正をのせただけであった。

デマが流布しやすい条件はそろっていた。老人福祉はいま人びとの関心を大きくひきつけている。Iは大きい。しかも記者自身が講演を聞いたわけではない。「菅野氏によると……」というような伝聞による記事はAを大きくする。中華まんじゅうに犬の肉が入っていたかどうかを自分で確かめず、また聞きで他人に伝えるようなものだからである。

加えて厚生行政、福祉行政への人びとの不信不安がデマを広がりやすくさせたと思う。「まさか厚生省の課長がそんなことはいうまい」と日本人の大半が思うほど厚生省が信頼されていたら、デマは発生しなかったか、または発生直後に消しとめられたことだろう。ところが、今、厚生省は〝大蔵省の厚生係〟とあだ名をつけられるほど予算削減の優等生ぶりを発揮している。お年寄りの福祉の貧しさを国民が実感している。そこにもデマが広がっていった背景があったように思う。

もちろん、いくつもの新聞がこの件でデマの媒介役をつとめたことに第一の原因があり、ほとんどの新聞社が誤りと分かってもほうかむりを続けたことを含め、記者の一人として恥ずかしく、なさけなく思う。

※前号のこの欄で「入所型施設の経営者には危険な落とし穴が待ちかまえている。質を落として利潤をあげたいという汚点である」とありましたが、「汚点」は「誘惑」の印刷ミスでしたので訂正しお詫び申しあげます。

(編集部)